

ヨハネ12章1－19節 「王の現れ」

1A マリアの備えにおいて 1－11

1B 葬りの日のため 1－8

2B 証しの犠牲 9－11

2A エルサレム入城において 12－19

1B 後から思い起こす御言葉 12－16

2B 止められない良き知らせ 17－19

本文

ヨハネによる福音書 12 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、11 章まで来ました。今日、また来週にかけて、12 章を一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は、12 章の前半部分、1 節から 19 節までを読んでいきます。

私たちは前回の 11 章における、ラザロのよみがえりの話を思い出す必要があります。先週、復活祭礼拝でしたが、その前から私たちは、復活信仰について見ていきましたね。マルタとマリアの兄弟であるラザロが、病気になっていたけれども、イエス様がなお二日とどまっており、それから出発したので、着いた時には死んで既に四日経っていました。けれども、主は、「ラザロよ、出て来なさい。」と叫びました。それで、出てきたのです。その時に、大勢のユダヤ人がイエス様を信じた、と 11 章 45 節にかいてあります。けれども何人かはパリサイ人のところに告げ口して、それでユダヤ人議会が召集されました。そこで祭司長カヤパは、政治的な理由からイエス様を殺すことに決定したのです。それは、イエスに人気が上がって、多くがイエスについていくようになれば、このメシア運動をローマはほおっておくわけにはいかないから、ユダヤ国民を潰しにかかるだろう。そうすれば、自分たちの地位も危ぶまれる。一人が犠牲になるほうが、国民全体が減じるよりよい、という政治的判断です。

12 章は、ラザロのよみがえりを目撃したユダヤ人たちが、まだその興奮が止まないうちに、過越の祭りが近づいているところから始まります。

1A マリアの備えにおいて 1－11

1B 葬りの日のため 1－8

1 さて、イエスは過越の祭りの六日前にベタニアに来られた。そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。2 人々はイエスのために、そこに夕食を用意した。マルタは給仕し、ラザロは、イエスとともに食卓に着いていた人たちの中にいた。

イエス様と弟子たちは、ユダヤ人指導者たちがご自身を殺すことを決定したので、エルサレムから離れて、ユダの荒野に近いエフライムという町に入っていました。けれども、ユダヤ人にとって最も大事な例年の祭り「**過越の祭り**」が近づいているので、再びエルサレムに近いベタニアに来られました。他の福音書では、らい病人シモンの家とあります。そこにラザロ、マルタ、マリアが訪ねに来ている、という感じでしょう。六日前とありますが、土曜日のことです。翌日、イエス様がすぐそばにあるエルサレムに入ります。

ヨハネの福音書で、以前、過越の祭りが近づいている頃に起こった出来事がありますが、覚えていらっしゃいますでしょうか？五千人への給食です。五つのパンと五匹の魚によって、五千人の成年男子、つまり女子供合わせたら二万にもなっていたであろう人数に、満腹させ、また有り余るほどの奇跡を行われた時です。彼らとその肉の必要が満たされた時に、こんなに私たちの困窮を埋めてくれる人はいない！とのことで、イエスを自分たちの王にしようと連れて行こうとしました。けれども、それに気づいたイエス様はすぐに退かれたのです。パンを食べて満腹したから、イエスを王として担ぎ上げようとしたのであって、「わたしがまことのパンです。」と言われて、イエスご自身を信じることを教えられました。その時、多くのユダヤ人はつまずいて、いなくなっていました。その時期が過越の祭りだったということも、彼らの熱狂を支えていました。エジプトの圧政から解放されたことをお祝いする日ですから、ローマからの圧政を解放するのがメシア、キリストであるとしていたからです。

ここに主の愛された三人がいます。マルタはいつものように給仕しています。体を動かし、頭を働かせるマルタのような人も主は愛されていますし、次に出てくる、いろいろ思い巡らし、あまり動かないマリアがいます。どちらも主は愛しています。そして、もっとすごいのはラザロです。ラザロは、一緒にそこに食事をしているということで、それ自体が大きな証しでありました。主が愛しておられることを、死んだのによみがえったことによって証しているのです。

3 一方マリアは、純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ取って、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。

一リトラは、わずか 32 グラムです。けれども、イスカリオテのユダが、300 デナリで売れると言っていますが、1 デナリは一日の労賃なので 300 日分の労賃ということになります。ほぼ一年分の労賃ですから、人によって違うと思いますが、聖地旅行を数回行けてしまうのではないのでしょうか！そう、これを一度に注いだということが味噌です。それだけ命をかけて、それだけ注いだということです。

マリアはかつて、イエス様の足元でその御言葉を聞いていました。今は同じように足に香油を塗っています。しかも、髪で足を拭いたのですが、ユダヤ人女性は普通髪を結わえていますから、

人々の前でそれをするのは恥ずかしいことでした。現代の女性でいうなら、化粧を洗い流したみたいな感じですね。自意識もみな捨てて、これを行ったことが分かります。

足元で、女性がこのようなことをするというのは、まさに王の前に出て、ひれ伏すことと似ています。相手があまりにも価値があり、尊厳があり、その前に出るために、自分の最高のものを差し出すことに他なりません。エステル記 2 章 12 節を見ると、ペルシアの王の前に出るおとめたちが、1 年もかけて準備をしたことが述べられています。6ヶ月間は没薬の香油で、次の6ヶ月間は香料と女のための化粧で化粧しました。また、第二歴代誌 9 章では、シャバの女王がソロモンに、「百二十タラントの金と、非常に多くのバルサム油と宝石とを王に贈った。(9 節)」とあります。

彼女はイエス様を礼拝していたのでした。昨日、ネットで知り合ったクリスチャンで、涙の出る一言を書いておられました。ご自身の教会が明日からオンラインになるということで、「本当にただただ悔しい。私の人生最大の喜びは私のゆるされがたい罪がイエス様の十字架によってゆるされたということ。それゆえに、ゆるしがたかった人をゆるせて自由な人生が与えられたこと。教会に行かない礼拝、本当にただ悔しい。..(ネット礼拝で)自分自身が生ぬるい信仰にならないように気をつけたいです。犠牲を払い続けたいというか。献金とか教会のポストにいれようと思います。本当に悔しいです。」¹犠牲を払わなかったら、どうするのか？こんなにイエス様が自分に良くしてくださったのに、自分のために命を捨ててくださったのに、ということです。

4 弟子の一人で、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った。5 「どうして、この香油を三百デナリで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」6 彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼が盗人で、金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいたからであった。

イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダとは、どういう人物だったのか？彼は、イエス様の一行のお金の管理をしていた、財務係だったので。つまり、かなりイエス様から信頼されていたと、周りの人々から思われていたであろう人なのです。お金を扱うのを任されているのですから、それだけ正直で神を恐れ、正しくなければなりません。だからこそ、イスカリオテのユダがまさかイエス様を裏切るとは、近くにいた他の弟子たちは思いつきませんでした。人はこうも偽ることができます。人を偽ることができるし、自分をも偽ることができます。

それから、イスカリオテのユダには、マリアのこのような礼拝の姿は受け入れがたいものでした。彼は計算して動いていました。貧しい人を施すのに使えばよいのにと計算していますが、イエス様には心を捧げていなかったのです。マリアの礼拝行為によって、自分の間の部分が明らかにされるような気分だったでしょう。だから、彼は率先してマリアを責めたのです。御霊に導かれる人

¹ <https://twitter.com/atsuocean/status/1251425115033579521>

がいます、このように肉の人、世の人は自分の闇が見えてしまうので、責められています。

7 イエスは言われた。「そのままさせておきなさい。マリアは、わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのです。8 貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいますが、わたしはいつも一緒にいるわけではありません。」

イエス様は、イスカリオテのユダの悪行をご存じでありながら、今、それを責め立てずに、優しく諭されました。しかし、その優しい諭しによって彼は悔い改めることをせず、かえって裏切り行為へと移ります。人は、光が来ると闇が明るみに出されるのを恐れる、とヨハネ 3 章にあるとおりです。

マリアの心をイエス様は知っておられました。こんなに高価なナルド油をご自身の足に塗ったというのは、イエス様が語られていたことをそのまま聞いていて、ご自身の死が近いことを察知していたからに他ならなかったのです。他のどの弟子も、何度となくイエス様からご自身が死ぬことを聞いていたのに、それでも心が鈍くなっていて、聞くことができなかった時に、です。彼女は言葉では説明できなかったでしょう、ただ心で感じて、正しいことを知っていました。そしてその知識に基づいて行動していたのです。私たちは、学問的に学んでイエス様を知るのではないのです。礼拝することによって、イエス様とその御心を知ります。

2B 証しの犠牲 9-11

9 すると、大勢のユダヤ人の群衆が、そこにイエスがおられると知って、やって来た。イエスに会うためだけではなく、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった。

イエス様がベタニアにおられて、らい病人であったシモンのお家におられて、そこにマルタ、マリア、ラザロがいるということが知れ渡りました。それで大勢のユダヤ人がやってきたのです。「人を死者の中からよみがえらせたイエスがいる。この方が来るべき大預言者だ！」として、ユダヤ人の一般民衆の一部が盛り上がりつつあったのが良くわかります。過越の祭りが近づいています。この群衆が、イエス様がエルサレムに入られる時に、「ホサナ！」と言って歓迎する人々の一部になっていきます。

10 祭司長たちはラザロも殺そうと相談した。11 彼のために多くのユダヤ人が去って行き、イエスを信じるようになったからである。

祭司長たちは、先に説明しましたように、ユダヤ人議会でイエスを殺そう、そうでなければ、人々はイエスについていくようになって、ローマがユダヤ国民を潰すようになると恐れたのです。政治的判断で、イエスを殺すことに決めました。ところが、ますますイエス様の人気が上がっています。人々が、自分たちの管轄下から離れて行きます。そこで、なんとラザロまで殺そうと考えています。

人が人を支配できないということを知りません。人が人の心を政治力や他の力で支配できているのなら、このようにさらに罪を犯すことになります。ダビデは、かつて姦淫の罪を隠すために殺人の罪を犯しました。彼らも、イエスを殺すだけでなく、ラザロを殺そうとしたのです。

これは言い換えると、ラザロはイエスの力とイエスの栄光の証人ですが、イエスの証人はイエスを憎む者たちによって迫害されるということですね。自分を憎んでいるのではなく、実は自分が証しているイエスを憎んでいるのです。

2A エルサレム入城において 12-19

1B 後から思い起こす御言葉 12-16

12 その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞いて、13 なつめ椰子の枝を持って迎えに出て行き、こう叫んだ。「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」14 イエスはろばの子を見つけて、それに乗られた。次のように書かれているとおりである。15 「恐れるな、娘シオン。見よ、あなたの王が来られる。ろばの子に乗って。」

翌日というのは、しばしば棕櫚の聖日と呼ばれる日曜日です。棕櫚というのは、なつめ椰子のこと。ここで群衆がなつめ椰子をもってイエス様をお迎えしている姿から、そう名付けられています。これは、明らかにイエス様を救い主としてお迎えしている姿です。詩篇 118 篇にある言葉で叫んでいます。「詩 118:25-27 ああ【主】よどうか救ってください。ああ【主】よどうか栄えさせてください。祝福あれ【主】の御名によって来られる方に。私たちは【主】の家からあなたがたを祝福する。【主】こそ神。主は私たちに光を与えられた。枝をもって祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。」今、読んだ「救ってください」というのが、「ホサナ」です。メシアは、エルサレムに王として入城される時に、こうやってほめたたえているのです。枝を持ってとありますね、それでなつめ椰子の枝を持っています。

ユダヤ人の祭りには、仮庵の祭りがあります。秋に祝うのですが、その時になつめ椰子の枝などを使って仮の庵をつくり、無事に約束の地に神が入れてくださったことを祝います。そしてゼカリヤ書 14 章には、世界の諸国が、メシアの来られた神の国で仮庵の祭りに集うことが書かれています。ですから、今ここでユダヤ人がイエス様を喜び迎え入れているのは、御国が来ること、メシアが来て、神の国を建ててくださることも思いの中に入れていているのです。かなり熱狂していますが、おそらくはローマ当局としては、「ちょっとお祭り騒ぎしているユダヤ人たちの一部」みたいに思っていたのではないのでしょうか？ユダヤ人の中でも、サブカルチャー的な、オタク的な動きと見られていたかもしれません。私たち日本の教会も少数派、サブカルチャー的ですから、当時の彼らと同じように、良くも悪くもあまり相手にされていないかもしれません。

そして、彼らの頭の中には、エルサレムで入り、ローマを打倒してくださり、神の国を建ててくださる方となっています。それが、当時のユダヤ人のメシアによる救いだったのです。ところが、イエス様はろばの子に乗っておられます。普通、馬に乗って、征服した国々の奴隷を引き連れて、財宝も携えて、勝利の凱旋をするのが普通の王の姿でした。ローマの将軍はそうやっていました。ところが、何かのお笑いではないのか？という感じですね、ろばの子にイエス様に乗っておられたのです。列王記第一には、ソロモンが騾馬に乗って、王の即位式が行われましたが、馬は戦いを意味しますが、ろばとか騾馬は平和を意味します。イエス様は柔和な、平和を造る方として来られました。

けれども、ユダヤ人たちが見逃していたのは、メシアが栄光と力をもってやってくる約束の合間に、見捨てられ、苦しみを受ける言葉もあるのです。今、引用した詩篇 118 篇にも、「ホサナ」と叫んでいる言葉の数節前に、こう歌っています。「118:22-23 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。これは【主】がなされたこと。私たちの目には不思議なことだ。」そして、メシアが来られるとはっきり書かれているダニエル書 9 章で、神の言葉を伝えているガブリエルはこう言っています、「油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。(26 節)」このように、見捨てられる、断たれるという言葉が預言の中にあるのです。

16 これらのことは、初め弟子たちには分からなかった。しかし、イエスが栄光を受けられた後、これがイエスについて書かれていたことで、それを人々がイエスに行ったのだと、彼らは思い起こした。

これは、弟子たちの反応です。弟子たちは、「イエスが栄光を受けられた後」とありますが、主がよみがえられ、天に昇られてからということ。主の復活で、心が開かれ、さらに聖霊が注がれて、全き理解が与えられました。イエス様は、「14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」と言われますが、このようにして、聖霊が思い起こさせてくださったのです。

主がなされていることで、弟子たちのように私たちも分からないことがあります。後になって聖霊の助けで、ああ、これはこういうことだったのだと分かるようになるでしょう。ですから、主の前にへりくだって、信じて、忍耐して、今、分からないことが起こっていても、そのままにしましょう！預言者ハバククも、自分の愛する国で何が起きているのか分からないので、主に訴えたら、「正しい人はその信仰によって生きる。(2:4)」と諭されました。

2B 止められない良き知らせ 17-19

17 さて、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたときにイエスと一緒に

いた群衆は、そのことを証し続けていた。18 群衆がイエスを出迎えたのは、イエスがこのしるしを行われたことを聞いたからであった。

他の福音書には出てこないことを、ヨハネは書いてくれています。イエス様を喜んで迎え入れた群衆には、ラザロがよみがえったのを見た人々があり、そして、そのことを聞いた人たちがいたということです。ラザロのよみがえりによって、確かにイエスが来るべきお方なのだということを証言していたのです。私たちも、復活のイエスに出会って、変えられた人こそが、最も人々にその良き知らせを伝播させていく力を持っています。

19 それで、パリサイ人たちは互いに言った。「見てみなさい。何一つうまくいっていない。見なさい。世はこぞってあの人の後について行ってしまった。」

パリサイ人たちが焦っています。彼らが何とかしてイエスを殺そうと思っていました。そして、祭司長たちがついに、イエスは殺さなければいけないと思っていました。エルサレムでは、イエスを捕えるために具体的に動いていたほどです。ところが、公にこのようにエルサレムに入っているのに、それでも捕えることができません。しかも、人々はイエスの後についていったしまったと言っています。神がそうさせているのです。祭司長も、パリサイ人たちも、自分たちで何とかできると思っていましたが、全くそうではないことに気づいたのです。次週、20 節以降を見ていきますが、主が捕らえられるのはあくまでも、その時が来たから、父なる神の御心と定めがあるからです。ご自分の死さえ、イエス様はご自身で支配しておられました。

人間は、自分でコントロールしようとしています。自分が何かをすれば事態は收拾すると思っています。けれども、自分が制御できないものがあるということを知らないといけません。その知らないもの、制御できないところには、神が、「わたしが神である」と語っておられるのです。制御しようと思えば思うほど、祭司長がイエスだけでなくラザロを殺そうと思ったり、罪から罪を重ねてしまいます。そして、弟子たちは何が起きているのか分かりませんでした。そういうことがあります。後になって聖霊が教えてくださる、思い起こさせてくださることがあります。

しかし、私たちの理解を超えて、イエス様の心を知ることはできるのです。マリアがそうでした。イエス様の足元にひれ伏していました。彼女は言葉で説明せず、行動に示しました。彼女なりの行動でした。こうしたうめきを、神は見ておられます。「ロマ 8:26-27 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしてくださるからです。」どうか、呻きというものを大事にしてください。そこには必ず聖霊が働いておられます、御心に従って執り成しておられます。